



特集

農水産業が 強くなる!!

農水産品に加工を施すことで新商品をつくり新商流をつくる。各地で取り組まれた農商工連携、地産地消、6次産業推進は地域活性化に大きく貢献してきた。商業が農水産業を支え、活力を持った農水産業が、さらに商業を強くする。今号は代表的な事例を紹介する。

「農」と「商工」をスムーズにマッチング 年間100万本突破の新飲料を開発

和歌山商工会議所
和歌山市

農林漁業者と商工業者が通常の商取引を超えて協力し、お互いの強みを生かして新商品や新サービスを開発することで、需要の開拓を目指す「農商工連携」。そのモデルケースともいえる事例が「和歌山ジンジャーエール」だ。わかやま農業協同組合（JAわかやま）と和歌山市農業委員会、和歌山商工会議所の3者が手を組み、農業者と商工業者をマッチング。それぞれが持ち味を生かして生産・加工・販売の道筋をつけ、年間販売数100万本を突破するヒット商品へと育てた。その秘訣はどこにあったのか。

面識のないもの同士が連携し 商品開発をスタート

平成20年7月に「農商工連携促進法」（中小企業者と農林漁業者との連携による事業活動の促進に関する法律）が施行されてから、その取り組みが各地で展開されている。ところが、成果に結び付い

現在も売れ行き好調な「和歌山ジンジャーエール」（250ml・税込180円）。賞味期限が長いという理由で、あえて瓶容器に。新生姜の色をそのままモチーフにしたボトルデザインは、女性から「かわいい」と好評だ



たケースはそう多くない。ひと口に連携といっても、面識のないもの同士が協力し合うには「つながぎ」が必要だ。ハンバーグをこねる際、卵を入れると材料同士がうまくまとまるのと同じである。しかし、そのつなぎ役が意外に難しいのだ。それがうまくいった事例の一つが、和歌山商工会議所が関わった「和

歌山ジンジャーエール」である。「当所が農商工連携事業に力を入れていくにあたっては、JAわかやま（以下JA）と協力することが不可欠でした。農地の活用や開発などを通じてJAともつながりの深かった和歌山市農業委員会に加わってもらい、地域活性化を目指して商工会議所、JA、市の3

者が協定を結ぶことになったんです」と同所企業支援部経営相談課リーダーの野田浩史さんは説明する。同年12月、同所は事業の第一歩として、農業者との連携に興味がある商工業者を募集した。すると15社から応募があり、その中から地元の農産物を活用して新商品を開

取材・清水 高
笠井尚紀
山田清志
関根利子